

「シッダルタ」

著者:ヘルマン・ヘッセ 訳:手塚富雄

角川文庫(172p, 140円, 1974年, 絶版)

紹介者:榎本博康

[紹介]

バラモンの家に生まれたシッダルタは、友のゴヴィンダと共に育った。修行を良くし、幼少より賢者の談話に加わり、将来はバラモンの王たる者と囑望されていた。しかしいかなる奥義も彼を満足させなかった。

彼は父の願いに反し、遍歴の禁欲者である沙門(しゃもん)となることを願い出る。ゴヴィンダも同行し、三年の苦行を重ねるが、彼を導ける程の師を得ない。その頃、ゴータマが仏陀であるとの噂を聞き、祇園精舎に向かう。

彼はそこの林苑で仏陀の説教を聞いた。一切が完全に明らかであり、仏陀の道は解脱へ通ずると。ゴヴィンダは仏陀に帰依し、一方シッダルタは彼独自の洞察により、更なる遍歴の旅へ出た。

彼は自らを師として生きることに覚醒し、より現実の物として世界を見た。河を渡り、街の入口で遊女カマラと出逢う。カマラの薦めで商人の協力者となり、巨万の富を築いて、長く世俗で快樂(けらく)の生活を送る。しかし再びカマラにより自分を再発見し、ある夜全資産を捨てて失踪する。

彼は昔渡った河の畔に来て、河に学ぶことを知る。河は常に同じ存在でありながら、刻々に新しい。河の渡し守の老人と兄弟の如くに生活する。

やがて、ゴータマが涅槃に入るとの噂が広まり、多くの人が祇園に向かうために河を渡る。そして、偶然にカマラも、シッダルタとの子供を連れて来る。しかし彼女は毒蛇に噛まれ死ぬ。後に残された少年シッダルタは父の生活を嫌い、街に出ていく。彼は子を失い苦しむが、それはかつての彼の父の苦しみでもあった。

やがて渡し守は彼一人となった。老ゴヴィンダが奇妙な渡し守の話聞き、彼を訪れ、お互いが誰であるかを知った。シッダルタの語ることは、ゴータマのような理論ではないが、深い洞察があった。ゴヴィンダがシッダルタの額に口づけをすると、そこにあらゆる生死、時間を超克した宇宙の内奥があり、シッダルタの顔に、世尊仏陀と同じほほえみを見て、涙した。

[感想]

私は題名が「シッダルタ」、つまり釈迦の幼名であるSiddharthaなので、これは釈迦の話かと思って読み始めた。所が、釈迦その人はゴータマGotamaと呼ばれて登場する。ここでヘッセはシッダルタを通じて、ゴータマと同様の素質を持ちつつ、現世を選択した者の人生を、ゴータマとのパラレルワールドとして描いたのだろうか。いわばもう一人の釈迦の物語である。

この話の中でシッダルタは二回走る。

一回目は、シッダルタが釈迦と問答をし、別れた後である。親友のゴヴィンダは釈迦に帰依



する道を選び、シッダルタはそこを去る選択をした後だ。真理を得るために釈迦の教えに帰依しようとする、たちまち自らを失ってしまう。そのような教条ではなく、自分自身にこそ真理を学ぶべきだと、つまり自らを師として生きることを悟った直後だ。世界は、そのものの裡(うち)にあるのだと知り、彼は喜びに輝き、風景は自ら輝き、彼は走った。

では二回目はいつだろうか。カマラとの子、少年シッダルタが、シッダルタとの生活を激しく拒否し、河を渡って街に逃げた、その少年を追いかけて取り戻すために彼は再び走った。しかし、街の入口、かつて若きカマラと自分が出逢った場所で、彼は立ち止まり、少年が二度と帰らないことを事実として受け入れた。

人が裡(うち)なる心につき動かされて走る時、そのような時をこれほどに鮮やかに切り出してくれた作品は稀有である。なぜ、走るという行為が極めて人間的であるかを、良く教えてくれる。この作品における走りを、ひとつのレトリックと解釈することもできるだろう。でも私はその立場をとらない。シッダルタは本当に一切の思考を停止し、息がきれ、足が萎えるまで走ったのだと理解する。

「シッダルタ」はヘッセの深い東洋哲学の理解に基づいた直感と洞察に満ちた作品であり、そのような奥深い所で読者に直接的に語りかけてくれる作品である。翻訳は格調高く、ほとんど翻訳であることを忘れる。読後は是非、静かに物思いに耽る時を持ちたい。

ああ、この最後の部分を、もっと自分の言葉で語りたいのだが、手が勝手に文字を書き出すほどに思考停止していない私には、今はできない。

(初稿1998. 7. 31)

[リバイバル感想]

現在は岩波文庫(2011/08発売、本体660円)で読むことができる。また新潮文庫でシッダールタ(高橋健二訳、本体520円)もある。喜ばしいことだ。この作品の素晴らしさを多く知ってほしい。

インドは今年(2020年)の1月に初めて行くことができた。ムンバイとデリーだ。あらかじめインドのことは折に触れて聞いていたので、デジャブ感はあるものの、やはり現実は想像を超える。現在はヒンズー教徒が大多数(約8割)ということで、この話にあるような仏教の香りは乏しいが、ヒンズー教が仏教の母体ということを思えば、つながりを感じることができる。



タージ・マハルを対岸から望む(2020. 1)

私が訪問した中で、最もこの話を想起させるような場所は、タージ・マハル(1632着工~1653竣工)を、ヤムナー川の対岸から眺めた風景であった。もっともムガル帝国第5代皇帝シャー・ジャハーン(1626-1657)の愛妃ムムターズ・マハルの墓廟として建設されたこの世界遺産は、イスラム建築であり、さらに仏教とは遠いのだが、この風景から、シッダルタが得た現生の富と、河の渡し守としての生活を、強引にひとつの画面にはめ込んだような錯覚を得ようとして、少しは成功した。

確かに現代においても、インドは人生の明暗を知り、そして超自然的な存在を夢想する宗教的な土壌を感じることができる。なぜか。余りにも貧富の差が大きいからだろうか、よそ者が安易に言えることではないが。

所で、余りにも過剰な人々の密集にパンデミックという言葉が浮かんだ。この訪問の直後に新型コロナウイルスで実際にそうなるとは思っていなかったが。タージ・マハル周辺も混んでいたが、観光では行かないような街中を歩いたので、おおっぴらな庶民の生活を垣間見ることもあった。

帰りのデリーの国際空港での混雑に相当参った。日本の祭りでもなかなか無いほどの密集だ。出国検査の能力が不足し、多くの乗客が長時間、狭いエリアで押し合い圧し合いしながら待機することになった。すでに荷物をあずけてあるので、航空機が乗客を置いて出発することは無いのだが、浮足立った人々がいて、主にアジアのビジネスマン達が個々に職員に早く通してくれとパスポートを振って大声で訴えるが、無視される。一方ヨーロッパの南の方の若者たちが、グループで割込みを繰り返して、少しずつ前に前にと入り込み、他の乗客との小競り合いが生じる。そして多数のインドの方々は一瞬と我慢し、耐えている。これも世界の縮図だ。

数時間遅れて日本行きの航空機に乗り込むと、結構ターバンを巻いた男性の比率が高い。普段からターバンを巻いているのはシーク教徒であり、ビジネス上手と聞いていたので、なるほどであった。

世界の将来の姿を考える上で、インドは重要な国だ。たとえ上っ面であっても、訪問できて良かった。まじめな話をすると、インドにおける日本の存在感は東南アジア諸国と比較すると薄いように感じた。頑張っているのはスズキ自動車、実に多く走っているが、かなり現地に溶け込む努力をしたのだろう。でも家電系など日本企業を見ない。単に企業進出ということだけでなく、インドは日本の大事なパートナーであり、もっとインドのインフラや生活にも貢献することができそう。まず、もっとインドを好きになろう。そしてインドのものを買おう。

加えてインドの国際的な緊張も推察することができた。ムンバイの飛行場の滑走路が、羽田空港よりきれいなことだ。一朝ことがある場合には、軍用に転用すると聞いて納得した。



ちょっと自慢。東京芸大サマースクール/シタール講座での筆者。スシュマ・オバタ先生（ネパール出身）のご指導をいただいた。（2008.8）



やはりカレー粉がいい。1個100gで100円程度。写真は野菜スパイスとミートスパイス。チキンもあったが食べてしまった。とびきりおいしい。帰りの飛行場で何も買えなかったため、これが唯一のお土産となった。（2020.1）

(2020.7.01)